



談話室

岩手，宮城，福島，そして東京

Iwate, Miyagi, Fukushima, and Tokyo

吉田英生*

Hideo Yoshida

11月の福島—泉田川のサケとの出会いから

昨年11月に、1991年11月、2001年11月に続き福島を訪れた。間隔が10年（ないし11年）なのは偶然だが、毎回11月なのは訳がある。双葉郡浪江町泉田（いずみた）川にサケが産卵のために遡上してくる時季に対応している。死を直前にひかえ命がけで産卵にやってきたサケには申し訳ないが、泉田川観光食堂名物のイクラ丼定食は美味である。その美味に出会えたのは、筆者の研究室を卒業したM君が東京電力福島第一原子力発電所に勤務していたので、晩秋の福島の旅に際して家族ぐるみでお世話になったことによる。

今回は遅ればせながら東日本大震災後の岩手・宮城・福島視察を目的として、東京の自宅から車で1泊2日の一人旅だった。エネルギー的には無駄が多いが、東京から被災地までの連続性を、身をもって感じたかったのだ。

東京から岩手へ

東北高速道路で北上する途中のサービスエリアで、「復興商店街を巡る旅 スタンプラリー」のチラシを見つけた。東北高速道路を岩手県最南端の一関で降り東方に50キロほど山道を走ると宮城県気仙沼市。途中、復興工事用とおぼしきダンプカーと多数すれ違う。急な山道から視界が開けるとニュースで繰り返し見てきた海岸付近の町並み—といっても多数のコンクリートの土台あるいは内部がえぐられた建物—が見える。人気（ひとけ）はほとんどないが、それでも復興屋台村や復興商店街が気炎を上げている。鹿折地区には第十八共徳丸（330トン）が打ち上げられたままになっている。近くにはプレハブのコンビニもぽつんと立っている。

気仙沼から20キロほど北上すると岩手県陸前高田市。海沿いに走ってもリアス式海岸のため山越えになる。山道から海岸に出る三叉路に、津波による被害を受けながらも営業している陸前高田南ガソリンスタンドがあった。せめても、ガソリンを満タンにし、店内で売っていた「がんばっぺしキーホルダー」（あの一本松と同じ高田松原の木を使ったもの）をお土産にいくつか買って協力する程度のことしかできない自分をもどかしくも感じる。陸前高田は広大な何も無い空間である。結果的に「瓦礫」と呼ばれる破片を集めて成形した台地のようなかたまりがある。そして小高いところや内陸に入ると再建中の町がある。

これらの被災地ではただただ被災後の「無」のすさまじさに圧倒され、被災された方々のことを思い浮かべると写

真を撮る気にはなれない。わずかに、前述のガソリンスタンドの健闘ぶりに心を打たれてシャッターを切った。

せっかく岩手に来たので、陸前高田からさらに北西に80キロほど内陸の花巻市にも寄ることにした。宮沢賢治記念館が目的である。ちょうど夕暮れ時となり、釜石街道の左側に猿ヶ石川を眺めながら野焼きの香もする情景は、日中に見た被災地とは対照的に幻想的である。これが賢治が理想郷としたイーハトブ（イーハトーブ）なのかと実感する。

宮城・福島から東京へ

花巻から宮城県名取市に160キロほど南下する。復興支援を兼ねて、コンテナを積み上げて10月にオープンしたばかりのホテルに泊まる。名取は仙台空港に近いところであるがホテル周辺は幸い津波の被害から逃れている。

2日目は、いよいよ国道6号線を南下して福島県入りする。相馬市や南相馬市では土地が平らなため、海岸から比較的離れたところを通っている国道の両脇にも、内部をえぐられた建物が続く。「この先通行止め」の案内が繰り返し現れ、車の数がどんどん減っていく。小高（おだか）駅前に行くと建物は比較的無事に見えるが町は静まりかえっている。ただ1軒だけ床屋の回転灯が、営業中のサインを送っていた。これこそ「一所懸命」ということだろう。

国道6号線をさらに南下すると、ついに検問所が出現し立ち入り禁止区域となるので、Uターンして福島市方面に険しい山道を西進せざるを得なくなる。思い出の泉田川のサケも何もあったものではない。原発避難者を含め、未だ全国で32万人以上の方々が避難しているという（復興庁2012年12月6日現在）。この数は新宿区の人口とほぼ等しい。

南相馬から70キロほど山道を通って福島市に出て、東北高速道路を東京に向けひた走る。あたりは暗く前方の車のテールランプのみがずっと見えていた。しかし、首都高速川口線で荒川を渡るとき（江北ジャンクション付近）に突如浮かび上がった東京の高層マンション群の豪華な夜景！これが同じ日本か！と思わずつぶやく。

未曾有の問題には未曾有の発想と行動

1日目に800キロ、2日目に500キロ、合わせて1,300キロの旅を終えて強く感じるのは、月並みな表現ではあるが、同じ日本という国の中に、いまだにとてつもない苦難に陥ったままの地域と、いまだにかつてからの豊かさの中に居続ける地域とが同居しているということである。今後のエネルギー選択の問題を含め、復興・再生へのこの未曾有の困難な問題に立ち向かうには、やはり未曾有の発想と行動が必要ではないのか。今年もその答えを自分なりに探し求めていきたいと思う。

*京都大学 大学院工学研究科 航空宇宙工学専攻
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
E-mail: sakura@hideoyoshida.com